

もっと広がる クスリの世界

薬の「かたち」の多様性

私たちが普段飲んでいる薬には、さまざまな「かたち」があります。これは単なる見た目の違いではなく、「どうすれば体の中でしっかり効くか」「どうすれば飲みやすいか」を考えて工夫されたものです。薬の形や作用の仕組みには、長年の研究と知恵が詰まっています。

もっとも身近なのは錠剤でしょう。

飲みやすく
効きやすく

表面を薄い膜で包んだ「フィルムコーティング錠」や、甘い膜で覆った「糖衣錠」は、苦みやおいを和らげて飲みやすくする工夫です。さらに、胃では溶けずに腸で溶ける「腸溶錠」、少しずつ溶けて長く効く「徐放錠」など、効き方を調整する仕組みもあります。形や大きさも、飲みやすさや薬の安定性を考えて設計されています。

カプセル剤もよく使われる形です。ゼラチンなどで作られたカプセルに薬を詰めることで、味やにおいを気にせず飲むようになっていきます。粉や顆粒りゅうりゅうを入れる「硬カプセル」、液体を入れる「軟カプセル」があり、薬を湿

気や空気から守る役割もあります。

一方、錠剤やカプセルが飲みにくい人には粉薬がよく使われます。粉薬には散剤、細粒、顆粒剤があり、散剤や細粒はサラサラした粉末、顆粒剤は粒をやや大きめにしたものです。大きさには決まりがあり、粒の大きさは「散剤<細粒<顆粒剤」の順になります。粉薬は年齢や体重に合わせて量を調整しやすく、さらに複数の薬と一緒に混ぜて調剤できるという利点もあります。

また、「ドライシロップ」という剤形もあります。粉のまま服用すること、水に溶かして液状にすることもでき、甘味がついているため苦みを感じ

にくい工夫がされています。このほかにも、飲みやすいシロップ剤、口に入れるとすぐに溶ける「口腔内崩壊錠」、皮膚に貼る貼り薬、皮下や筋肉、血管内に投与する注射薬など、使う場面や目的に合わせた多くの工夫があります。

薬の「かたち」は、ただの形ではありません。安全に、しっかり効かせて、そして飲みやすくする。そんな工夫が薬一つ一つに込められているのです。

(加藤 寛史・県病院薬剤師会常任理事)

<毎月第4火曜日に掲載>